

鑑賞の手引き

斎藤清《凝視》 1962年（昭和37） 横浜美術館蔵（斎藤清氏寄贈）

■作家について

斎藤清（1907～1997）は、戦後日本を代表する版画家です。はじめ油彩画を制作していましたが、安井曾太郎の版画に魅せられて独学で木版画を習得し、1951年に日本人で初めて国際展で受賞しました。京都や会津の美しい風景や、女性や猫といったモチーフを、優れたデザイン感覚と木版ならではの質感を生かして表現しました。

■鑑賞カードの作品《^{ぎょうし}凝視》について

画業の初期から晩年まで「猫」は繰り返し用いられてきたモチーフでした。どの作品も猫に向けられる斎藤のあたたかなまなざしを感じさせるとともに、非常にデザイン性の高い作品となっています。

鑑賞のポイント！

◆ねこは何をしているところかな？

《凝視》というタイトルにもあるように、一匹の猫がじっとこちらを見つめています。にらみを利かしているけれど、左右の眼の位置がずれていてちょっと間抜けな様子。背景は石畳のようにもカーペットの模様のようにも見え、屋内にいるのか屋外にいるのか人によって意見が分かれそうです。カクカクとした抽象的なパターンは、猫の耳の形にも重なり、背景にも猫が隠れているのかも…と想像が膨らみます。もし人間の言葉を話せたら、何と言っているように感じるか、子どもたちに問いかけてみてください。

◆本物のねこと比べてみよう。

鼻、口、ひげ、後ろ足など本物の猫にあるはずの色々なものが省かれています。また毛のふわふわとした質感もあえて表現されていません。直線と曲線、白と黒といったシンプルな構成は、非常に洗練された印象を与えます。それでも猫のしなやかさや温かさ、あるいは俊敏さが感じられるのはどうしてでしょうか。デザイナーとして働いていたこともある斎藤は、このように形を単純化し、優れた画面構成を得意としました。

◆背景の模様注目！

ところどころに白の残るザラザラとした表面の質感は、力を加減して摺ることで生じる「摺りむら」を利用した技法だと考えられます。この技法によって、絵具がたっぷり乗った猫の体と、軽やかな背景が対比されています。斎藤はこのほかにも、版木の木目を強調したり、版木を引っかけて得られる独特の質感によって、モチーフの量感や陰影を表してきました。また背景のパターンは、3段階のグレーの版で摺られていますが、版が重なることで新しいかたちが生じたり、色が濃くなっていたりするところがあります。